

何のための英語教育かを問い続けよう：英語教育の未来

中井 弘一

親愛なる本紙読者、勉強会・教員免許状更新講習参加の皆さんへ

本学を去るにあたり、親愛なる皆さんに私の思いを伝えたい。それは、「何のための英語教育か」を問い続けて欲しいということである。これから先の英語教育を切り拓く英語教員であることの生き甲斐をそこに見つけ出して欲しいという願いでもある。

日本の英語教育はどのように始まったか、皆さんもご存知であると思う。文化五年（1808年）英国船フェートン号事件が長崎で起こり、国防上から英語研究の必要を痛感した幕府が長崎通事に英語学習を命じたのが英語学習の始まりである。文化八年（1811年）に『諸厄利亜興学小笠』、文化十一年（1814年）には『諸厄利亜語林大成』が作成された。極めて簡易な内容[例 school — スクール書塾(テラ)、library — リフレリ書房(シヨモツベヤ)]で収録語数約 7000語の辞書である。また、福沢諭吉が蘭学から英学へ学習変更を決心した安政六年（1859年）には、ジョン（中浜）万次郎が『英米対話捷徑』を作成している。

Q How many letters are there (コシチャン ハヲ メニ ラタシ アー ザヤ)

問曰 幾許字数力其処ニ在ル

A There are twenty-six in English

(アンシヤ ザヤ アー ツーエンテ セキス イン エングレス)

対曰 英国ニ於テハ其処ニ二十六字有リ

このように、万次郎が聞こえたとおりにカタカナ発音表記した会話書であるが、ペリーが来航し、開国を迫られ海外との交渉に差し迫って必要となった英語教材である。こうして日本の英語教育は始まった。交渉する必要性と新しい知識を得る必要性がその原動力であった。

時を経て、50 年ほど前私が中学生の頃、中学校の英語教科書は、be 動詞か一般動詞かどちらで始めるべきかの論争があった。今では小学校に日常英語の活動が導入され、それに引き続いて挨拶の会話などで始まっている。当時は、中学・高校生用学習辞書はほとんど出版されておらず、また音声に関する学習環境は極めて不十分な状況であった。それが今では、様々な学習辞書・電子辞書・電子黒板があり、多様な英語学習雑誌が出版され、教室には ALT がおり、CD 教材、DVD 教材・ネット教材が豊富にあり、コンピュータで音声も画像も茶の間で学習できる環境がある。果たして、教育環境の想像を超える発展に比例して生徒の英語力も劇的に伸びたであろうか。残念ながら実際は、英語を話せる人材が育成されていないと学校英語教育は非難され続けている。

今、IT 革命とともに情報が瞬く間に拡がり、グローバル化した情報・経済が一挙に押し寄せるといふ高次元の開国状況（International exposure）に日本の社会もある。そのため、国際的

な競争への対応が求められ、英語教育においても早期化、高度化がめざされている。

そうした中、皆さんは、英語教育の目的を担当する生徒にどのように話されているであろうか。English is useful because--

- ・ You can talk to lots of new people.
- ・ You can use English when you are traveling.
- ・ You can understand films and TV programs.
- ・ You can understand pop songs.
- ・ It helps you to get a good job.
- ・ You need it if you want to study at university.
- ・ People do business in English all over the world.
- ・ It's the international language for most people.
- ・ You can read English literature in its original language.

こう応えるだけでいいだろうか。もっと世界や日本の未来の動向を考えるべきではないだろうか。5年後、10年後、20年後の日本や世界はどうなるであろう。これから先の世界を VUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity) World と表現することがある。「不安定な、爆発寸前の」「はっきりしない、不確実な」「複雑で理解しづらい、込み入った」「あいまいな、多義的な」世界である。環境問題が深刻化し、テロは終止せず、分断傾向が進むなど先行き不安定で不透明な状況にこれからの子どもたちは生きていく。「グローバル化に対応するため」という単純な英語教育目的論だけでは回答にならないのではないだろうか。思考力、共有力が一層求められるであろう。

現在、世界の人口は 70 億人、その中で、母語話者、公用語話者、外国語話者などを含め、英語はおよそ三分の一が話していると言われる。欧州国家では一人の人間の中に複数の言語能力があり、現実の場で必要に応じて言語を切り替えながら社会的な課題を解決する Pluriculturalism(複文化主義)と Plurilinguism (複言語主義)を教育施策に取り入れようとしている。母語以外にもう一つ言語を話せること、相手と共有された言語によって文化差を乗り越えて意思疎通を図ることを、社会としてではなく個人の能力としてその育成をめざしている。

さて、このように様々なことを考えて行くと、これからの日本を背負う若者に英語教育の目的をどう伝えていくべきであろうか。「英語によってより多くの人々とのコミュニケーションが可能になる」「外国語学習によって学習者の人間性・知性が育てられる」に留まらず、英語そのものが文化である言語文化を扱い、英語社会において物心両面にわたる活動の様式と内容の総体となっている、ものの見方や価値観を生徒に考えさせることもミッションとして伝えることが大切である。

時代は絶えず変化し続ける。その変化の中で仲間の皆さんには戸惑うことが多々生まれることであろうと思うが、そういう時には立ち止まって、「何のための英語教育なのか」と絶えず問い続けて欲しいと願って、この最後の投稿書簡を結びたい。

---

(なかい・ひろかず 教授/教員養成センター長)